



鶴岡市 / 松ヶ岡開墾場 本陣堤

小春日和楽しむ 晩秋の庄内

 庄内銀行

Cradle 11

「美しくなつかしい、日本をのせて。」  
「クレードル」出羽庄内地域文化情報誌

2015 November/December  
平成27年11月日発行(隔月定期発行)第6巻2号(通巻32号)

発行 / Cradle事務局 山形県鶴岡市山王町8-15(株式会社 出羽庄内地域デザイン) 電話0236(64)0888  
制作 / Cradle編集部 山形県酒田市京田2-59-3「コアック・クリエイティブ」 電話0234(41)0012



美しくなつかしい、日本をのせて。

# Cradle

特集  
羽黒山 松例祭  
庄内憧憬  
中沢新一  
人類学者

「クレードル」出羽庄内地域文化情報誌

11

2015 November/December  
TAKE FREE  
NO.32

ああ、なんという素晴らしい日々であったことか。友愛というものは実在するのである。庄内が私にそれを教えてくれた。

## 友愛と庄内 中沢新一

いまから十数年前、大学のゼミで教えていた学生を引き連れて、私は新庄から山奥に入った大蔵村で、農業のまねごとを始めるようになった。その頃、大蔵村役場の職員をしていた森繁也さんから、山間地農業をいっしょにやらないか、というお誘いを受けたのが、きっかけだった。

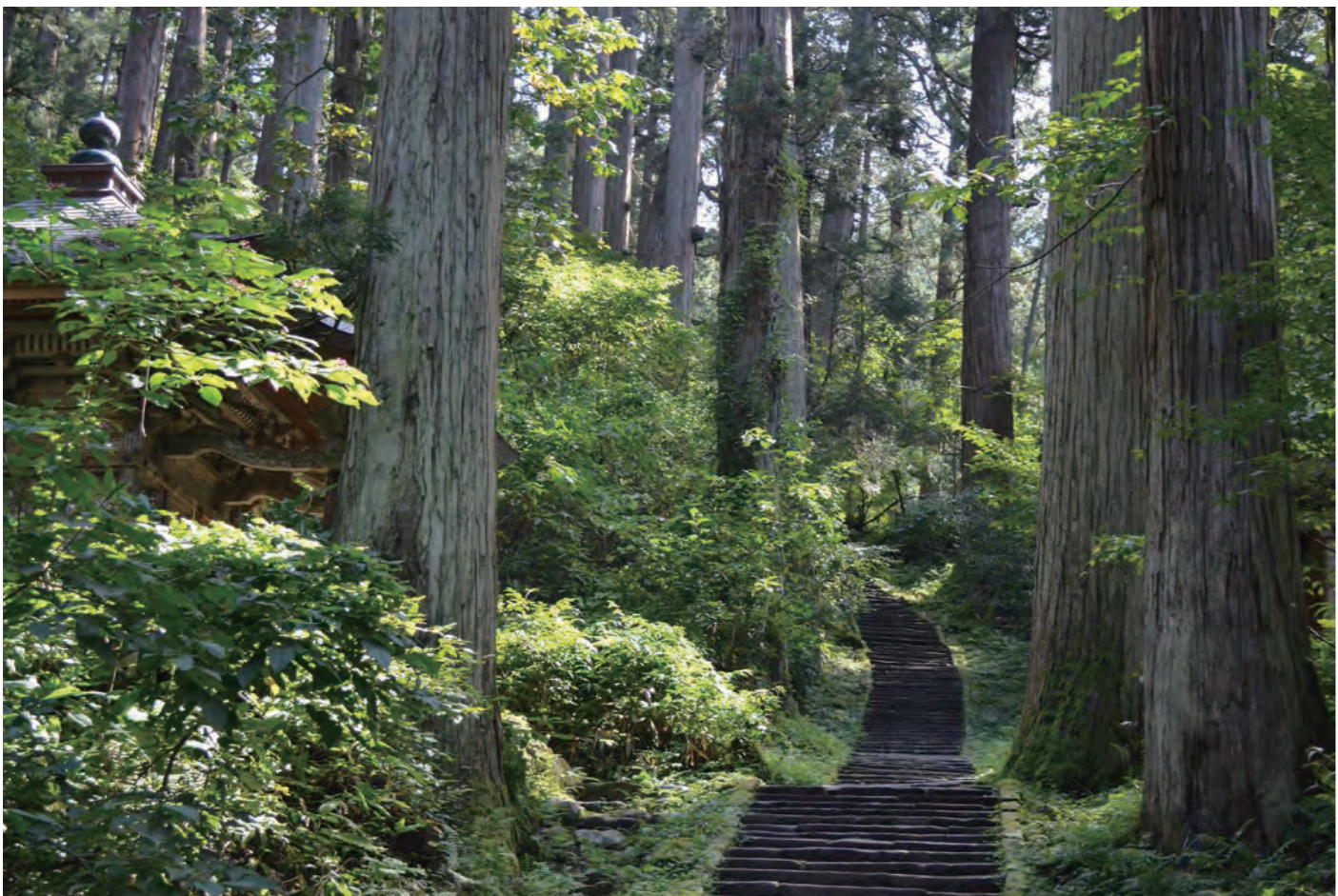
森さんは舞踏家でもあったから、昼間の農作業がすんで一段落すると、さっそく空き家になった民家を舞台にして、森さんと学生らによる宴がはじまった。そこにある晩のこと、大きな風呂敷包みを抱えた男が三人、ガタピシなる家の扉を押し開いて突然入ってきた。みんなはいっせいに、そちらのほうを振り向いた。

三人はみんな森さんの知り合いで、大蔵村でなにか面白いことがはじまっているらしいと聞きつけてやってきたのだと言った。一人は山形市から来た千歳さん、上品な立ち居振る舞いの方で、聞くと

山形市で大きな設計事務所をやっているかたわら、山形の宗教史の研究をしているという。もう一人は庄内町で米作りをしている阿部さん、すぐにみんなに阿部ちゃんと呼ばれるようになるほど、ひょうきんで頭がよくって明るい農民だった。三人目が星野さん。羽黒山で大聖坊という宿坊を営む、れっきとした山伏の先達である。

大きな風呂敷包みには、千歳さんの用意した豪華な酒の肴がつまっていた。私たちは森さんの舞踏を観ながら、大いに酒をのみ、語りあった。初対面であるのに、まるで百年来の親友のようなになった私たちは、おたがいが同じ理想を目指していることを知って、びっくりした。千歳さんは山形的靈性の再生を目指し、阿部ちゃんは農民的靈性の表現者たらんと欲し、星野さんは羽黒山伏の世界に新しい靈性的覚醒をもたらそうとしていた。森さんと私は三人の想いを聞いて、ひどく感動した。森さん、りを結んだのだった。

それ以来、私の中で庄内がぐつと近い世界となった。星野さんの大聖坊を根城にして、ほうぼうを遊びまわった。千歳さんのご接待で鶴岡の料亭に上がり、お年を召した芸者さんから古い芸を見せていただいたこともある。学生といっしょに星野先達の指導のもと、数日間の山伏体験を組んだこともある。かわいらしい女学生もたくさん混じっていたから、大先達も大いにご満悦で、彼女たちにハードな山伏修行を課して、楽しんでいく風情であった。修行の満願の日、山から降りてきた私たちを星野さんの奥さんが用意してくれた、みごとに精進料理が待っていた。またも大酒。ああ、なんという素晴らしい日々であったことか。友愛というものは実在するのである。庄内が私にそれを教えてくれた。



羽黒山杉並木参道

ながざわ・しんいち／哲学者、思想家、人類学者、宗教学者、明治大学野生の科学研究所所長、1950年山梨県生まれ。宗教、哲学から、芸術、科学まで、さまざまな領域に思考を展開している。1993年「森のパロック」で読売文学賞、2004年「対称性人類学―カイエ・ソバージュ」で小林秀雄賞、2006年「アースダイバー」で桑原武夫学芸賞、著書に『チベットのモーツァルト』、『哲学の東北』、『天津液と原素』(共著)、『日本の大転換』など多数。

特集 | Special Edition

# 松例祭

羽黒山

羽黒山特殊神事のひとつ「松例祭」は  
12月31日から1日1日にかけて  
羽黒山頂で行われる歳夜祭です。  
その歴史は古く、門前町の手向地区で  
連綿と受け継がれています。  
長老山伏「松聖」による冬の峰  
若者衆による大松明引き  
羽黒山伏たちの神事など  
「3年見学しないと分からない」と  
いわれるほど複雑で奥深いこの祭りには、  
人々のどのような祈りが  
込められているのでしょうか。

〈取材協力・写真提供〉  
出羽三山神社、山形県、鶴岡市羽黒町観光協会  
松例祭保存会、多聞館、熊澤禎男

〈参考資料〉  
松例祭保存会ホームページ  
伊藤武著『開山1400年記念 出羽三山』みちのく書房(1996)  
大川廣海著『出羽三山の四季』新人物往來社(1984)

写真 / 出羽三山の里フォトコンテスト 平成22年入賞作「気炎」

平成26年3月、国の無形民俗文化財に  
指定された「松例祭の大松明行事」。



9月24日の「幣立祭」。三三九度を交わした位上と先途は以後、共に冬の峰行に励みます。



写真提供：熊澤領男

毎年11月15日から12月末まで「松の勸進」が行われ、庄内各地で法螺貝の音が鳴り響きます。



大みそかの晩、羽黒山頂では若者衆が大松明引きのスタートを告げる、五番の法螺の音を待ち構えています。

# 羽黒町手向地区で 江戸時代から続く松例祭は 庄内地方の歳夜祭です。

毎年、大みそかの夜を徹して行われる松例祭。その始まりの儀式ともいえる「幣立祭」が今年も9月24日に執り行われ、手向在住の松聖2人が「冬の峰」行に入りました。

りなんです。だから祭りに関わる人は全員、松聖を通して神様の力をいただいているわけです。奥深いお祭りです。松例祭はかつて「精霊祭」といわれ、開祖の蜂子皇子が悪鬼に見立てた大松明を焼き払って疫病を鎮めたことによる

来するといわれます。その説にさまざまな要素が融合し、今のような複雑多岐な内容に。明治5年の修験道廃止令によって一旦中断しますが、数年後、手向の人々の力によって出羽三山神社の特殊神事として復活しました。「こ

平成25年6月、「松例祭保存会」が発足しました。翌年3月には「松例祭の大松明行事」が国の無形民俗文化財に登録。祭りを通して受け継がれてきた地域の精神文化を、改めて未来へ継承しようとする動きが、手向の人々によって始まっています。



小聖・太田慶春さん  
出羽三山神社権禰宜  
位上の冬の峰を導く。

昭和30年生まれ、入江町在住。宝積坊の当主。祖父の代から3代にわたって松聖を務める。

太田 秀廣さん

松聖

位上

平成27年

Sendo

Ijou

先途

松聖

大川 深匠さん

昭和28年生まれ、松原町在住。出羽三山神社の氏子。10月末までは仕事を続けながら松聖の行に励む。

小聖・東友和さん  
出羽三山神社権禰宜  
先途の冬の峰を導く。

羽黒山が秋の空気に包まれた9月24日、山頂近くの斎館で「幣立祭」が行われました。この日、平成27年の松聖に任命されたのは、位上方に太田秀廣さん、先途方に大川深匠さん。2人も羽黒山麓の手向地区に住んでいます。「幣立祭は、2人の松聖が神前で三三九度の盃を交わし、百日間の修行を誓い合う儀式です」と話す出羽三山神社禰宜の吉住登志喜さんに、松例祭について伺いました。

毎年、大みそかに夜を徹して羽黒山頂で行われている松例祭は、出羽三山神社の氏子400戸によって執り行われる歳夜祭です。主役となる2人の松聖は、幣立祭を機に「冬の峰」行へ。毎年、暮れになると羽黒山伏たちが庄内一円を回る「松の勸進」も、この修行の一環です。「この時、松聖が御祈禱した御札2体を皆さんにお配りするので、その際に皆さんからいただく初穂料は神様にお供えされ、松例祭の費用となっています。その意味で松例祭は、庄内地方全体の歳夜祭といえますね」。

そして冬の峰結願の日となる大みそか。山頂では手向の若者衆や羽黒山伏たちが、松聖の験力を競べるために各行事を競い合います。「つまり松例祭は、松聖がどれだけ修行して、出羽三山の神様がそれに応える験力をどれだけ与えてくれたかをお披露目するお祭



祭前日の12月30日、羽黒山頂庭上にて上町下町が分かれ、若者衆が協力しながら大松明(ツツガムシ)を作ります。

松例祭最大の見せ場となる大松明引きの担当は、手向に暮らす若者衆。20代から40代までの約60名が11月初旬から大松明作りの準備を始めます。  
若者衆の松例祭

# 位上方、先途方に 分かれ、競い合う 手向の若者衆。

松例祭で大松明引きを競い合う手向地区の若者衆。現在、手向には10の町があり、若者衆を組織するのは山頂から近い4つの「上町」と麓側の4つの「下町」で、合わせて60名ほどが参加しています。そして準備から当日までを取り仕切るのが、その年の当番町。長く上町の下長屋町で若者頭を務め、今年も当番町の副頭として祭りに参加する多聞館の土岐彰さんに、若者衆について伺いました。「若者衆に仲間入りするようになるのは大体20代が多いです。10年くらい続けると、引き綱をもらえる綱延や綱付の順番が回ってきたりして、そのうち会計や副頭をするようになります。そして人によっては40代で頭を数年して若者衆を



おおいまつ 大松明  
ツツガムシを象っているとされる2体の大松明。大松明引きで位上方が勝てば豊作、先途方が勝てば豊漁になるといわれています。



引退しますが、その後は役者などをし、さらに松聖になる人もいます。

そんな若者衆の活動は上町下町ごとに役員が顔合わせをする6月に始まります。9月24日の幣立祭には当番町の頭が参列。8つの町の頭が集まる10月の八町会議を経て、11月には若者衆全員が参加して大松明作りの練習を行います。そして松例祭が迫る12月後半に大松明の部材となる綱を作り、祭前日は羽黒山頂庭上で大松明を一日がかりで仕上げます。「当番町頭の一番の手腕は、この時に大松明をいかに早くきちっと仕上げるかです。若者衆の行事はすべて上と下の競争です。大松明引きも、きれいに早く燃え上がらせるのは自分たちの成果ですが、お聖さまの験力の現れでもあるわけですから、自

分たちがお聖さまに代わって動いているという気持ちでやっています。

昔から位上方・先途方に分かれて競い合ってきた手向の若者衆。しかし近年は地域の若者不足が進み、組織づくりが難しくなってきました。土岐さんが住む下長屋町も若者がいないため、なかなか頭から抜け出せない状況です。「子どもの数も少ないし、いずれは存続が難しくなるかもしれません。でも、『大松明引き』は重要無形民俗文化財になりましたからね。これからは、町同士の競い合いなど大切なところを守りながらも、祭りを継承できるようにどう変えていくかだと思います。」  
11月7日、若者衆全員で大松明づくり練習会が行われます。松例祭に向けて活気づく季節が、まもなく訪れます。



(上)11月初旬、上町下町ごとに大松明を作る練習を行います。  
(下)12月後半、8つの町の若者衆の正副頭16名が大松明の部材となる綱を作ります。



### 羽黒町手向地区

上四町と下四町のどちらが位上方、先途方につくかは、その年の松聖の居住地などによって決まります。

副頭 林伸行さん

正頭 猪口幸紀さん

副頭 土岐彰さん

正頭 小関修さん

山頂から遠い4つの町で構成。鶴沢町・池ノ仲・入江町・八日町。今年の当番町は八日町。

山頂から近い4つの町で構成。古墓町・桜小路・下長屋町・亀井町。今年の当番町は下長屋町。



9月24日の幣立祭後、小聖を従えて羽黒山頂の各所を参拝して回る松聖たち。翌日から自宅参籠を50日間送ります。

松聖の修行「冬の峰」は、手向に生きてきた長老山伏の最後の行。興屋聖の五穀に稲霊が宿るように祈り続け、松例祭で満願の日を迎えます。

松聖の百日行

# 百日間かけて 松聖を務めあげること は人生最大の喜びです。

昔から手向に生きる人々の最高の名誉といわれてきた松聖。

幣立祭での任命式が終わった翌日は興屋聖を背負って自宅に戻ります。百日行の開始です。その間、松聖は肉や魚を口にせず、刃物を体にあてることできません。そして前半50日は、自宅の祭壇に興屋聖を祀り、毎朝每晚、天下泰平・国家安泰・五穀豊穰・悪霊降伏を祈ります。

後半50日が始まる11月13日からは、参籠場所を自宅から羽黒山頂の齋館へ移します。15日から「松の勧進」で手向地区を勧進。12月1日から10日までは鶴岡市山王町の日枝神社に参籠場所を一旦移動し、最初に旧庄内藩主酒井家にご挨拶に行った後、旧鶴岡市内を

こやひり  
興屋聖

藁の農小屋を象った神具で、冬の峰では、この中に五穀の種を置き、松聖が毎日ご祈禱します。由来は、開祖が村人に五穀の栽培方法を教えた際、農小屋に寝起きたこと。



勧進して回ります。

松例祭当日になると、松聖は齋館から「補屋」へと移動します。そしてすべての行事が終わる夜半、守り続けてきた興屋聖の五穀を補屋の土間にまき、冬の峰行を静かに終えます。「その後、参集殿で宮司から「大変長い間ご苦勞をかけました」と松聖の満願証書をもらうと、涙が出てきての。人生で一番感激する瞬間でないかな。して午前3時過ぎに小聖や役者、頭と石段を降りて家さ帰るんだけど、随神門くぐって歩いていくと、家族が門のところまで待っているわけ。これは両方とも感激する瞬間だの」と話すのは、平成18年に位上を務めあげた大進坊の早坂真一さん。現在は既修松聖会の会長です。

もともと松聖は、山伏修行の最後の行として、手向地区に住む長老山伏の中から選ばれてきました。「位上」は宿坊を営む祝部会から、「先途」は氏子からという習わしです。「今は宿坊が減ってこの習わしも変わってきたけれど、昔は宿坊がたくさんあったからの。松聖になれる人もいっぱいいたし、修行を成し遂げるのも大変だった。自分が丈夫で家族も丈夫で、長く家を留守にしても大丈夫な人じゃないとできないからの」。そう話す早坂さんは、曾祖父の代から松聖を担ってきた家のため、松聖をすることへの使命感が自然に芽生えたと話します。「でも実際は、本当に自分が成し遂げられるのかと不安になったり、途中で修行をやめたく

なったりしての。結局、最後まで自分を支えたのは、こんな大変なことを先人たちも皆やってきたんだから、という想いですよ。だからこそ、満願証書をもらった時にすごく感動するんです」。現在、既修松聖会には95歳を筆頭に41名が在籍し、松例祭では60〜70代の既修松聖が「大目付」や「所司前」の役を担うなど、若手たちをサポートしています。「松例祭は、松聖や若者衆、役者がいないと成り立たない祭りだけれど、綱を作って奉納してくれる人や、松の勧進で初穂料を奉納してくれる庄内一円の人たちもいないとできないわけです。いろいろな人の力が合体して続いている、スケールの大きい、おもしろい祭りだと思いますの」。

10月20日、朝のお勤めをする位上の太田秀廣さん(上)と先途の大川深匠さん(中)。自宅参籠の間は、自宅の祭壇にて興屋聖を守り続けます。／(下)11月14日、羽黒山に昇山。以後、松例祭までの50日間は齋館が参籠場所となります。



- 1 まるき直しは作り直しの意味。綱まきによって切り刻まれた大松明を復元することでツツガムシの再生を意味する。
- 2,3 「大松明引き」を前に、4本の引き綱をめぐる討議が始まる。引き綱には順位があり、上・下町ごと各町は他町より格上の綱を手にしようと、大碗で酒を酌み交わしながら駆け引きをする。酒の力も手伝って、延々1時間ほどの交渉が続く。
- 4 雪穴を掘る「砂はき」を手に、位上方と先途方は庭上の33尋(ひろ/約60m)先に穴を掘る。



4. 砂はき行事



2. 綱さばき



3. 綱まき



1. 補屋内



1. まるき直し



3. 綱さばき



4. 腹ごしらえ



2. 補屋外観

- 1,2 補屋の内部は位上方と先途方の2つに仕切られ、松聖が若者衆を従えて籠る。祈禱所。
- 3 ツツガムシを擬した2体の大松明は松聖の祝詞の後に切り刻まれ、「切り綱」は庭上の群衆にまかれる。奪い合ってケガをすることのないよう、相撲で決着をつけることも。
- 4 補屋では神事に先立って若者衆が腹ごしらえ。ほうぎの実をまぶした「親玉(おやだま)」と呼ばれる握り飯はとかく美味。親玉とお神酒は一般客にもふるまわれる。

## 大松明を焼き払い、 新たな火が鑽り出される 冬の峰、百日の完結

12月31日、大みそか。冬の峰入りの修行が満願を迎えるこの日、松聖、小聖、若者衆や役者らが羽黒山頂に参集し「松例祭」本番を迎えます。夜通し行われるこの祭りには毎年、庄内だけでなく県外、海外からも、年越し詣でや初詣とあわせて多くの人が訪れています。

松聖2人が修行で得た験力で、どちらが神意に叶うかを競う諸行事は、本殿補屋、庭上の3カ所でも同時に進行します。一つ一つの行事が、五穀豊穡と天下泰平を願うという一つの物語を編み出す中で、重要なものが「火」の存在です。火は古来、生命の象徴として、また神の依り代として信仰されてきました。松例祭では、悪鬼を焼き払った不浄の火を、新しい年に向け清浄かつ生命力のある火に打ち替えるという一連の

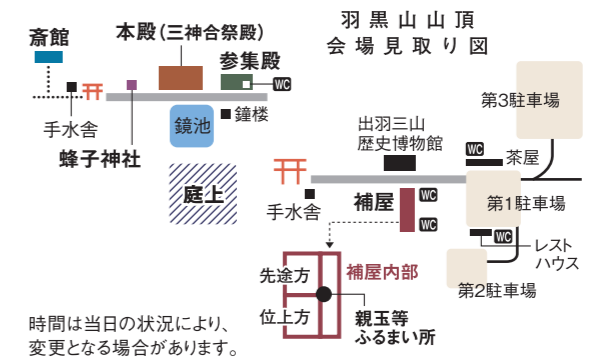
神事が繰り広げられます。

その始まりとなるのが「綱まき」です。前日に作った大松明(ツツガムシの背綱や節綱を切り刻んだ「切り綱」を、松聖が群衆めがけてまき、松聖がツツガムシを退治したことを表す行事です。切り綱にはツツガムシが持つ強大な威力が備わっているとされ、家の軒先などに掛けておくと魔除けや火防になるとして、集まった人々は競って手に入れようとします。

しかし、退治したツツガムシは、夕暮れになると再び息を吹き返します。「大松明まるき直し」は、解体された大松明を若者衆が作り直す行事で、大松明はもとの半分ほどの大きさになって「復活」します。

こうして庭上での行事が一段落すると、すっかり日は沈み、山頂は冬の冷気の中へ。一方で補屋の中は、焚火と人の熱気で充満し、いよいよ祭りもクライマックスを迎えます。

## 松例祭の流れ



12月31日

9:00 ◎若者早昇り

10:00 ◎若者頭昇山

11:00 ◎松聖齋館から補屋へ

15:00 ◎綱まき(庭上)  
◎大祓祭(参集殿)

16:00 ◎除夜祭(本殿)

17:00 ◎神拝(補屋)

17:30 ◎腹ごしらえ(補屋)  
◎賜酒(補屋)

18:00 ◎大松明まるき直し(庭上)  
◎松例祭本殿祭、蜂子神社祭(本殿/蜂子神社)

19:00 ◎綱さばき(補屋)

20:30 ◎砂はき(補屋)

21:00 ◎砂はき行事

21:10 ◎御掟目(補屋)



「砂はき」は底上で大松明を焼き捨てる場所に、雪穴を掘る祭具。位上方と先途方の各4町へ松聖より授与される。



大松明を焼き捨てる場所までの距離「33尋」を測る。33尋は、羽黒修験の領土、東33カ国を表し、領土外で悪鬼を焼き払うことを意味する。



「大目付(おおめつけ)」と呼ばれる役者が、神事で不正がないよう小聖と若者衆に掟目を言い渡し、確認する。



- 1、2 明けて新年。国分けとは領土支配のこと。日本66カ国のうち、東33カ国が羽黒、西24カ国が熊野、九州9カ国が英彦山の領土という故事にならい、それぞれ三神の化身である役者が年頭に領土を確認し合う。
- 3、4 大松明を焼いて穢れ衰えた火を、新たに打ち替える重要な神事。白塗りの顔に紅をさした位上方と先途方2人の松打は、鏡松明を3周した後、競って新しい火を鑽り出す。清浄な火に守られて1年が始まる。



2. 国分け神事



1. 国分け神事



2. 大松明引き



1. 大松明引き



4. 火の打ち替え神事



3. 火の打ち替え神事

- 1、2 祭りの山場「大松明引き」は本殿の「験競」と連動。「兎跳ね」の5人目の時に吹かれる「五番法螺」を合図に、庭上で待ち構えていた若者衆は大松明を引いて一斉に駆ける。33尋(約60m)先で大松明を焼き捨て、その着火の遅速や炎の勢いで優劣が決まる。
- 3、4 験競を行うのは12人の山伏。「鳥飛び」は飛ぶ姿の美しさと高さを競い、「兎跳ね」は2人の山伏が机を叩き、白兎が呼応する速さで競う。鳥と兎はそれぞれ太陽と月を象徴。



4. 験競(兎跳ね)



3. 験競(鳥飛び)

## 越年の例大祭は地域の信仰の縮図。その祈りは、未来へ続く。

まもなく年がゆく頃、祭り最大の見どころである「大松明引き」が行われます。本殿から聞こえる五番法螺を合図に、庭上では氣勢を上げた若者衆が大松明を引き、雪上を一気に駆け抜けます。大松明に放たれた火はたちまち柱のように立ち上り、宵闇を染めていく様は荘厳かつ幻想的です。こうして悪や穢れは絶え、山頂は新しい年を迎えます。新年を迎えた庭上には、「鏡松明」といわれる大歳神の依り代が立ち、4人の役者(山伏)がその鏡松明から火をもらい受け、「煉松明」を振って火の輪を描く所作をします。ここからは「火の打ち替え神事」です。するとそこに異様な扮装をした者が現れます。火打ち石と火打ち金を持った「松打」です。松打は、4人の役者と共に鏡松明の周りを3度まわり終えると、庭上の向こう側で火皿を持って立つ「稜持」に向かって一気走り出します。そこで火打ち石と火打ち金をこすり、閃光が走った瞬間、新しい年を照らす清浄なる「火」が生まれるのです。

これらの行事はいずれも競い合いのもとで行われ、位上方が勝てば豊作、先途方が勝てば豊漁を約束するといわれています。その結果が松聖に報告されると、祭りを締めくくる「昇神祭」が斎行されます。松聖は守り続けた興屋聖の中から五穀を取り出し、「天下泰平、五穀豊穰、万民快樂、敬つて白す」と唱えて補屋の土間へとまき、ついに百日行の結願の時を迎えるのです。豊穰への祈り、平和への祈り。ゆく年とくる年をかけて祈りを捧げる松例祭は、この地域が自然の生命力のもとで暮らしてきたという歴史の縮図といえます。自然を畏敬し、祈りの象徴としてきた、私たちの一心の願いでもあるのです。

### 松例祭を 楽しもう

15時からの「綱さばき」を皮切りに、さまざまな神事の見学ができます。補屋にも入ることができ、神前を拝し、お酒や握り飯をお楽しみながら祭りの雰囲気味わうのもおすすめです。神事の大半は屋外で行われるため、寒さ対策を万全に。参集殿やレストハウス、茶屋も利用できます。当日は臨時バスも運行します。

※鶴岡駅前から羽黒山頂までの路線バスの臨時ダイヤについて詳しくは庄内交通へお問い合わせください。  
023552612600

※車で出かける方は、第一・第二駐車場をご利用になれます(無料)。山頂までは羽黒山自動車道の通行料金ががかかります(普通車400円)。



元日の朝、大松明引きで使われた引き綱が、各町で選ばれた家(「綱延(つなのべ)」)の合掌に掛けられる。

◎綱のし



松聖、若者衆ら一行は補屋から斎館へと移動し、精進落としの宴を開く。お膳にはニシンの麹漬けや数の子など祝い肴が並び。

◎にし寿司(斎館)



本殿で若者衆らに勝敗が告げられた後(御披露)、補屋で待つ松聖はその結果を受け、最後に土間を国土に見立てて五穀をまき、祭りを締めくく。

◎御披露

◎昇神祭(補屋)

0:30ごろ ◎火の打ち替え神事(庭上)

0:00 ◎国分け神事(庭上)

1月1日

23:00 ◎大松明引き(庭上)

22:30 ◎験競(本殿)

21:30 ◎験競 ※リハーサル(本殿)

リハーサルのみ本殿に上がつての見学、撮影が可能。本番は撮影不可。



位上方、先途方の若者衆は庭上に出て、「綱さばき」で得た4本の引き綱を大松明に結び、「五番法螺」を今か今かと待つ。

◎大松明引き準備(庭上)







## 酒田米菓の オランダせんべい

「た〜べちゃった〜たべちゃった」と山本リンダが歌い  
「友・遊・裕の酒田米菓です」と水島裕が登場する  
酒田米菓の懐かしすぎるCMは  
リニューアルした工場で一挙放映中!

物心ついた時にはパリッと軽やかな食感がやみつきとなり、塩味が効いた1枚に当たればさらに手が止まらなくなってしまう。そんな庄内人のソウルフード、オランダせんべいが今年6月、発売当初の味を再現してリニューアルした。

発売は昭和37年。米問屋を営んでいた酒田米菓の創業者が、「庄内ならではの特産品を作りたい」との思いで商品開発に挑んだのが始まりだった。欧米化が広がる時代において、庄内米の美味しさを最大限に生かせる洋風なせんべいを作りたいと、サラダ油を使ったあっさり塩味の薄焼きせんべいを日本で初めて開発。厚焼き醤油せんべいが主流だった世の中に衝撃を与えた。

それから50数年。オランダせんべいは今も同じ手法で作られている。生地は庄内米の飯米100%。風味を引き立てるため原料には精米したての米を使い、生地づくりから出荷までをすべて自社工場で製造。熟練職人が気候の変化やお米の状態をみながら品質管理する。妥協を許さぬこの姿勢が、50年超のロングセラーの秘訣だ。

そんな酒田米菓に最近新たな風が吹いた。製造工場内に見学ルートやカフェができ、オランダせんべいの製造工程が土日祝日も見学できるようになったのだ。きっかけは、創業者が描いた酒田米菓の未来絵図を見て育った佐藤栄司氏が、昨年11月に社長へ就任したこと。「創業以来、庄内米に生かされてきたことに感謝し、その米文化を次世代に伝えること」がコンセプトだ。原点回帰による前進。オランダせんべいのリニューアルもその一環だったのだ。さすが、「おらだのせんべい」だ。



オランダせんべいのネーミングは「私たち」を意味する庄内弁「おらだ」を使って「おらだのせんべい」を洋風イメージにしたもの。東北限定販売もそのコンセプトによるものとか。今年8月末にオープンした観光工場「オランダせんべいFACTORY」内2階カフェには、ここでしか買えないオリジナル商品がある。

酒田米菓 ☎0234-22-9541  
オランダせんべいFACTORY ☎0234-25-0017



秋の光さす玉川寺

庄内俳句紀行

# 秋の色静かに移る 玉川寺を歩く

鳥海山に初冠雪、白鳥の飛来が告げられると、山の頂から流れる美しい稜線が見える日も、次第に少なくなる。夜中、時雨れて屋根を打つ雨音が、心の中を寂寥感で満たそうとする。

季語  
秋の色  
(あきいろ)  
秋色、秋光、秋景色、秋望む。秋らしい色のこと。

雲の合間から青空があふれる朝、まだ秋の花が残る鶴岡市羽黒町の玉川寺に向かった。稲刈り後の色あせた田に、月山へと流れる雲の合間から光芒がさす。日矢、天使の梯子、ともいわれる光の帯は、まるで天へと続く道のようなだ。

豊年の天をしみなく日矢降らす  
—水内慶太

羽黒山へ向かう参道の大鳥居の袂を右

花の寺ともいわれる玉川寺庭園は、室町時代に作庭され、その後、江戸時代中期に改修された。池泉回遊式蓬莱庭園で、国指定名勝。ひょうたん型の池泉には、鶴と亀をかたどった石組があり、池の南には登り龍、北には下り龍の燈籠が佇む。春は桜に始まり、初夏の躑躅、九輪草、花菖蒲、夏には蓮、睡蓮、そして秋には、萩や秋海棠などさまざまな花が咲く。目の前に広がる池泉の前には、沢枯梗や竜胆が咲き、本堂脇の千両の実や築山にある染井吉野が色づき始めていた。庭園内をゆつくり歩くと、足元にはひっそりと溝蕎麦が咲き、紫式部の実や蝮草の赤い実も目に飛び込む。躑躅の帰り花が一輪ひっそりと咲いていた。



風に揺れる秋明菊

に折れ、月山を正面に仰いで玉川地区に入る。水音響く堰のむこうに山門が見え、その手前には風そよぐ竹林がある。山門をくぐると、石畳に落ちる樹影と秋光が出迎える。夏の光にはない優しさと憂い、すぐに消えてしまいうような儚さがある。本堂の前、秋明菊が群れを成し、秋光を浴びて囁き合うように風に揺れる。

群れ咲きの秋明菊の白しづか  
—あべ小萩

流れゆく雲を借景秋あかね

—あべ小萩

枝垂れ桜の樹影が、苔の上の落ち葉へと脚を伸ばす。時折、水音を立てて池の鯉が宙に舞う。飛沫が秋光に輝き、それと戯れるように秋茜が翅を煌めかせる。縁側に上がって緋毛氈に膝を折り、お抹茶をいただいた。庭園の借景となる空が目まぐるしく変わる。日がさし込んだと思えば、たちまち陰る。秋の光の静と動、明と暗が心を動かす。同じ景色でも光一つでこんなにも気持ちが変わるのだろうか。秋の花が終わりに近づく、庭園の彩りは、染井吉野から枝垂れ桜、紅葉へと移ろいでいくという。色のない季節を迎える直前に、錦秋で賑やかに染まる。

憩ふ人秋色すすむ中にあり

—橋本鶏二

帰り道、鳥海山を重く覆う雲を見ても落胆することはなかった。いつも晴天では、わからない美しさがあると知ったからだ。気づくと雲の合間には、青空が大きく広がっていた。

◆玉川寺 鶴岡市羽黒町玉川字玉川35  
写真・文||あべ小萩(月刊俳誌「月の匣」同人、俳人協会会員)



秋明菊



竜胆



苔の上の樹影と落葉